

スペイン語における受動 HACER 使役構文について

石 岡 精 三*

Some Notes on the Passive HACER Causative in Spanish

Seizo ISHIOKA

Key Words: Barrier, Case Array, Coindexing Rule

0. はじめに⁰⁾

(1)で観察されるように、スペイン語の HACER 使役構文の受動用法に関する文法性判断は大きく2つの方言グループで異なっている((2)は(1)に対応する能動表現、/の左右は後述する A, B 方言での判断を表す)。

(1) a. */?(?) Juan fue hecho venir (Cano Aguilar 1981:p.242)

'John was made to come'

b. */?(?) el testigo fue hecho comparecer ante el tribunal

(Cano Aguilar 1981:p.242)

'the witness was made to appear in court'

c. */?(?) la catedral fue hecha construir por el Papa

(Guasti 1991:note 9)

'the cathedral was made to construct by the pope'

d. */?(?) el coche fue hecho arreglar al mecánico

(Moore 1991:p.292)

'the car was made to repair to the mechanic'

e. */* fui hecho traer un regalo (Cano Aguilar 1981:p.242)

'I was made to bring a present'

原稿受付：平成5年5月26日

*長岡技術科学大学語学センター

- (2) a. hicieron venir a Juan
- b. hicieron comparecer ante el tribunal al testigo
- c. el Papa hizo construir la catedral
- d. hicieron arreglar el coche al mecánico
- e. me hicieron traer un regalo

(1) の用例が一律に非文と判断される方言 (A 方言と呼ぶ) は, 対応するフランス語の例 (3) に類似する。

- (3) a. *Jean a été fait travailler beaucoup (Guasti 1991:note 9)
'Jean has been made to work a lot'
- b. *la maison a été faite construire à Casimiro (Pearce 1990:77)
- c. *la maison a été faite construire par Casimiro
(Zubizarreta 1986:20a)
'the house was made to be built by Casimiro'

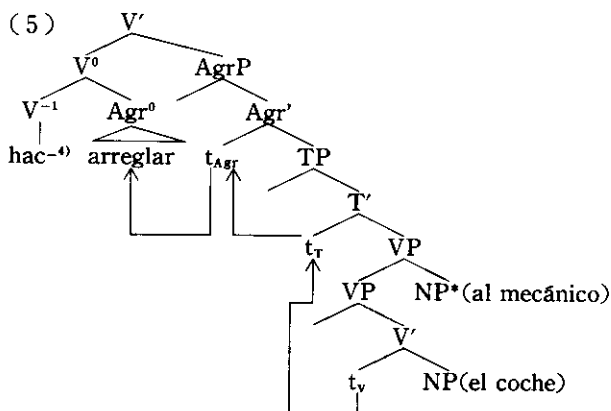
一方, (1e) を除く (1a-d) を基本的に文法的と判断する方言 (B 方言) は, 対応するイタリア語の例 (4) に類似する。¹⁾

- (4) a. Gianni è stato fatto lavorare molto (Guasti 1991:6)
'Jean has been made to work a lot'
- b. la macchina è state fatta riparare a/da Gianni (同上:1)
'the car has been made to be repaired by Gianni'
- c. Giovanni fu fatto riparare la macchina (Burzio 1986:p.232)
'Giovanni was made to repair the car'

本稿では, (1) に観察される方言間の相違を説明すると思われる論法が提示される。特に, B 方言における (1e) の非文法性がどのようなプロセスに起因するかが検討される。第1節では, HACER 使役構文の構造が提示される。第2節では, 受動構文の一般的特性が検討される。第3節では, (1d) の非文法性を説明する Moore (1991) の概略が示され, その問題点が指摘される。第4節は, (1) の用例すべてを説明する仮説が設定される。

1. HACER 使役構文の構造

フランス語の使役構文と同様に、スペイン語の使役動詞 (HACER) は AgrP を下位範疇化すると考えられる。また、イタリア語の場合と同様に、スペイン語の [±Finite] CP (AgrP) 中の V は少なくとも Agr 位置まで移動する。²⁾更に、本稿では主語 NP* が VP に付加した位置に基底生成されると仮定する。³⁾このように考えると、例えば (2d) の構造として以下の (5) が想定される。



embd. AgrP において、V は T を経由して Agr 位置まで移動する (embd. T 位置において不定法形態が生成される)。更に、S 構造の段階で、不定法形態が移動した embd. Agr⁰ が matrix V (*hac-*) の MSS (Morphologically Selected Slot) 位置へ移動する (cf. Guasti 1991, Roberts 1991)。この移動により、一種の複合動詞 [matrix V⁻¹ (*hac-*) + INF] が形成される。このように生成される複合動詞は、(6) の Case Array を持つと考えられる (当該複合動詞 (Complex Verb) を CV と略記)。⁵⁾格付与に関して、石岡 (1992, 1993) と同様に、以下の (7) が仮定される。

- (6) { a. ___ Acc (Dat)
 b. ___ Dat

- (7) a. Case assignment is optional
 b. When a verb assigns Case, the entire Case Array must be assigned.

- c. A CV loses its property of assigning a structural Case when the Case in question has already been assigned by an embd. V.
- d. Dat cannot be assigned to an element base-generated as V' s sister.

(7b) により, Acc を付与しない場合の Case Array (6a) の Dat 付与は排除される。(7c) により, embd. V が Acc を付与する場合の Case Array (6a) の適用は阻止される。(2d) の embd. AgrP に生起する NP に対する格付与は 2 様に適用されることになる。複合動詞 (CV) が NP (*el coche*) と NP* (*el mecánico*) のそれぞれに, Acc と Dat を付与する (Case Array (6a))。あるいは, embd. V がその sister 位置にある NP (*el coche*) に対格を付与し, CV が主語 NP* に Dat を付与する (Case Array (6b))。前述のように, (7c) は, embd. V がその sister NP (*el coche*) に Acc を付与した場合の CV による主語 NP* (*el mecánico*) に対する Acc 付与を排除する。結果として, (2d) の主語 NP* に対する Acc 付与は許容されない。⁶⁾

次に, embd. V が自動詞 (Unergative Verb) である用例を検討する。本稿の仮説 (6-7) によれば, (8a) の NP* (*María*) は Acc あるいは Dat を付与される。

- (8) a. *hice llorar a María*
- b. *la* (Acc) *hice llorar*
- c. *le* (Dat) *hice llorar* 'I made Mary/ her weep'

Finnemann(1982)が指摘するように, ラテンアメリカ地域の方言での embd. AgrP 中の主語 NP* に対する接語 (Clitic) は, Acc あるいは Dat 形態で生起する (当該地域は一般的に, Lelsmo の地域でない)。Finnemann (1982) の調査によれば, (8c) は (8b) よりも formal と判断される。Moore (1991) が指摘するように, 仮に (8c) の Dat 接語 (*le*) が Lelsmo とされる Peninsular Spanish の影響であるならば, (8a) の NP (*María*) は Dat でなく Acc を付与されることになる。⁷⁾ この議論は問題を惹起する。前述のように, Case Array (6) は主語 NP* (*María*) に Dat を付与可能である。如何にして, この Dat 付与が阻止されるのであろうか。明らかに, Case Array の (6a) と (6b) は同一レベルにあると考えることはできない。(2d) の派生において述べたように, Case

Array (6b) の適用は、(6a) の適用が阻止された場合に発動する。換言すれば、Case Array (6b) は、(6a) の適用によって Case Filter の要請が満たされない場合に限り、つまり最終手段 (Last Resort) として適用される。そこで、(6) は以下のように修正される。

(9) Case Array of CV:

- $$\left\{ \begin{array}{l} \text{a. } ___\text{Acc (Dat)} \\ \text{b. } [___\text{Dat}](\text{as a last resort}) \end{array} \right.$$

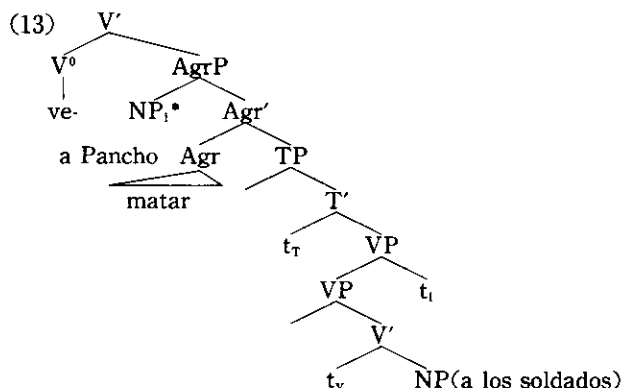
本稿の仮説群は、embd. V が能格動詞 (Ergative Verb) の例である (2a) を適切に派生させる。この場合、embd. AgrP 中の主語 NP* (*Juan*) は embd. V の sister 位置の生成される。能格動詞はその sister に格を付与することはない (cf. Burzio 1986).⁸⁾ 結果として、主語 NP* (*Juan*) は CV の Case Array (9a) によって Acc を付与されることになる。

ここで、知覚構文について考える。以下の例が示すように、embd. AgrP 中の主語 NP* は不定法形態の動詞の前位置に生起可能である。

- (10) a. of *llorar a la princesa* (Subirats- Rüggeberg 1987:p.194)
 b. of *a la princesa llorar* 'I saw the princess cry'
- (11) a. *vimos matar a los soldados a Pancho*
 b. *vimos a Pancho matar a los soldados* (Finnemann 1982:p.74)
 'we saw Pancho kill the soldiers'
- (12) a. *les dejamos ganar la partida a los extranjeros* (Moore 1991:p. 156)
 b. *dejamos a los extranjeros ganar la partida* (同上)
 'we let the foreigners win the game'

(10-12) 中の (a) の例は、HACER 使役構文と同じ構造 (5) を想定することにより説明可能であろう。(b) の例はどのような構造を持つのであろうか。本稿では、(10-12) の (b) の例においても matrix V が AgrP を下位範疇化すると考える。上の (a) 用例と異なるのは、主語 NP* (あるいは、ある特定の場における V の sister 位置にある NP) が基底生成された位置以外で格を付与される点にある。当該 NP に格が付与される位置として embd. SPEC (Agr)

位置が想定される。つまり、当該 NP は基底生成された位置から embd. SPEC (Agr) 位置へ移動することになる。例として、(11b) に対応する構造 (13) を検討する。前述したように、スペイン語の [\pm Finite] CP (AgrP) 中の V は少なくとも Agr 位置まで移動する。このように、V が移動した embd. Agr はその sister である TP を L 標示する (TP \neq bar.).⁹⁾ また、embd. AgrP もまた、matrix V によって L 標示される (AgrP \neq bar.). (13) において、複合動詞 (CV) が形成されない点に留意されたい。それでは、embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した NP に格を付与する要素は何か。本稿では、matrix V (VER, OIR, DEJAR, etc) と前提する。また、matrix V (VER, OIR, DEJAR, ect) は、Case Array (____ Acc) を持つと前提する。¹⁰⁾



(13) において、matrix V (ve-) と embd. V がそれぞれ、embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した NP* (Pancho) と NP (los soldados) に Acc を付与する。¹¹⁾ HACER 使役構文において、知覚構文 (10-12) に並行する事象の存在が認められるであろうか。以下の (14-15) から明らかなように、HACER 使役構文と知覚構文の類別が判然としない方言グループ (あるいは Idiolect) と両構文を峻別するグループが存在する。¹²⁾

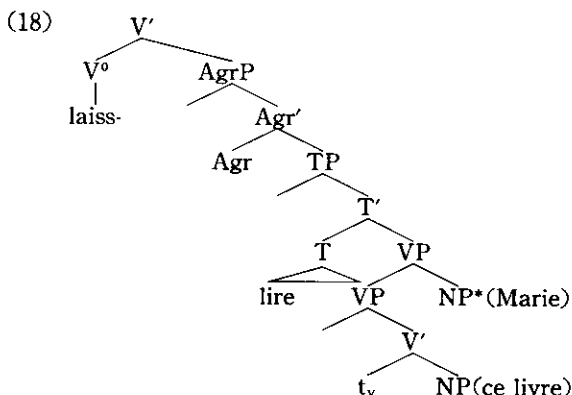
- (14) a. Pepe hizo llorar a la princesa (Subirats- Rüggeberg 1987:p.194)
 b. *Pepe hizo a la princesa llorar (同上)
 'Pepe made the princess cry'

- (15) a. *hicieron trabajar a María* (Moore 1991:p.158)
 b. *hicieron a María trabajar* (同上)
 'they made Mary work'

第2節に移る前に、フランス語の LAISSER 使役構文について概観する。石岡 (1992, 1993) において主張されたように、当該構文を導入する matrix V (*laiss-*)はスペイン語とイタリア語の対応構文と同様に Agrp を下位範疇化すると考えられる。また、当該構文の embd. TP は、V が embd. Agr 位置まで主要部移動した場合でも TP を L 標示することはないと考えられる (TP=bar.)。結果として、基底生成された位置にある主語 NP* の embd. SPEC (Agr) への移動が排除されることになる (embd. SPEC (T) 位置への移動が可能である)。具体的に、以下の (16-17) を検討する。(16a-b) の基底構造として、(18) が想定される。

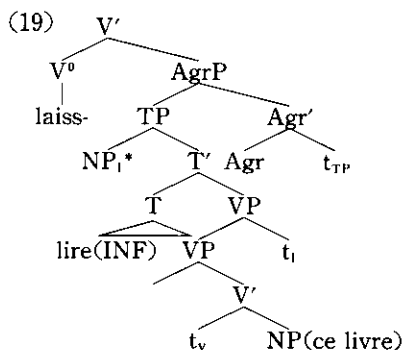
- (16) a. *Jean a laissé Marie lire ce livre*
 b. *Jean a laissé livre à Marie*
 'Jean let Marie read that book'

- (17) a. **Jean a fait Marie lire ce livre*
 b. *Jean a fait lire ce livre à Marie*
 'Jean made Marie read that book'



embd. V は、基底生成された位置にある主語 NP* (*Marie*) に格を付与しない。よって、当該主語は格が付与される位置へ移動することになる。embd. T は、語彙的要素が付加移動しているため、その sister である VP を L 標示する。つまり、当該 VP は bar. を構成しない。結果として、主語 NP* の embd. SPEC (T) 位置への移動が可能となる。しかし、この位置は格が付与される位置でない。また、matrix V (*laiss-*) が当該 SPEC (T) 位置へ移動した NP* に格を付与することはない。embd. Agr が matrix V による統率に対して Relativized Minimality bar. (RMB) を構成し、この統率関係を許容しないためである（同時に、bar. として TP が介在する）。¹³⁾つまり、embd. Agr の RMB 性と embd. TP の bar. 性を同時に相殺するプロセスが必要となる。

この bar. 性相殺プロセスとして、embd. TP 全体の embd. SPEC (Agr) 位置への移動 (Vacuous Movement) が考えられる (cf. Haverkort 1992)。その場合の構造として、以下の (19) が考えられる。前述のように、embd. TP は bar. を構成する。しかしながら、embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した TP は、L 標示定義 (20) と SPEC-Head Agreement の適用により、bar. を構成することはない。



(20) Definition of L-Marking:

Where α is a lexical category, α L- marks β iff β agrees with the head of γ that is θ -governed by α .¹⁴⁾ (Chomsky 1986:p.24)

α と β はそれぞれ、matrix V (*laiss-*) と embd. TP に対応する。 γ は、embd. AgrP に対応する。 SPEC-HEAD Agreement の適用により、 γ (embd. AgrP)

の主要部(Agr)はその SPEC 位置へ移動した embd. TP に一致する。α(matrix V (*laiss-*) はその sister である AgrP を θ 統率する (同時に L 標示する)。よって, matrix V は embd. TP をも L 標示することになる (embd. TP ≠ \bar{a}). 同時に, embd. TP の移動により, embd. Agr が matrix V による統率に対する RMB を構成しないことになる (embd. Agr は, embd. SPEC (T) 位置へ移動した主語 NP* を c 制御しない)。結果として, embd. SPEC (T) 位置へ移動した主語 NP* (*Marie*) は matrix V (*laiss-*) によって統率され, 適切に Acc を付与される (これにより, (16a) が生成される)。¹⁵⁾

(16b) はどのように生成されるのであろうか。embd. V (t_v) の sister 位置にある NP (*ce livre*) と主語 NP* (*Marie*) の相対的位置に留意されたい。主語 NP* は基底生成された位置 (VP に右方付加した位置) にとどまっていると考えられる。つまり, (16b) の基底構造は, embd. AgrP 中の主語 NP* が基底生成された位置にあって移動していない点を除けば (19) と同じものである。ここで, 当該主語 NP* に格を付与する要素が問題となる。embd. V が基底生成された位置にある主語 NP* に格を付与することはない。matrix V (*laiss-*) は当該位置にとどまっている主語 NP* を統率しない (embd. T が RMB を構成する)。matrix V (*laiss-*) は embd. T 位置にある不定法形態を統率する。この統率関係によって生成された [matrix V + INF] は, 一種の合成動詞を形成する (これを, Reed (1991a-b, 1992) にならって動詞統率連鎖 (Verbal Government Chain, VGCh と呼ぶ)。この VGCh は, (6a) の Case Array (____ Acc (Dat)) を持つと考えられる。結果として, NP (*ce livre*) と NP* (*Marie*) はそれぞれ, VGCh から Acc と Dat を付与されることになる。FAIRE 使役構文の用例である (17) は, 当該構文において, VGCh の形成が義務的に発動すると前提することにより説明可能である。¹⁶⁾

2. 受動構文について

受動の HACER 使役構文の検討に先立ち, 本節では一般の受動構文について考える。以下のフランス語の例でも明かなように, 受動構文における過去分詞は, 性・数に関して主語 NP と一致する。

(21) a. trois tables ont été repeintes (par Jean) (Ouhalla 1991:p.99)

'three tables have been repainted (by Jean)'

b. Jean a repent trois tables (同上)

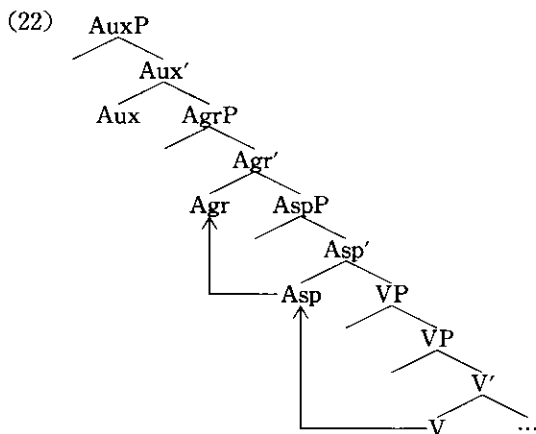
'Jean has repainted three tables'

c. Jean les a repeintes

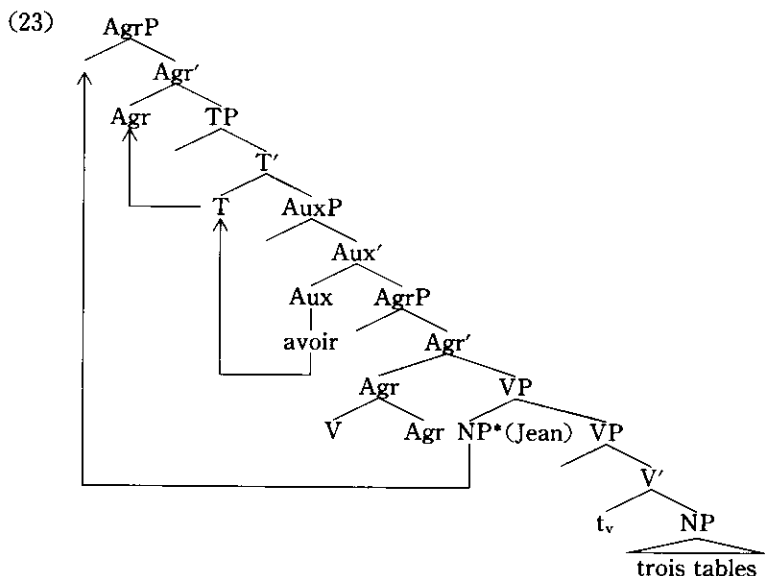
'Jean has repainted them'

d. *Jean les a repaint 'Jean has repainted them'

まず、(21b-d) のように、能動態で過去分詞を含む文を検討する。Belletti (1990) に従って、過去分詞を伴う助動詞範疇 (AuxP) は以下の構造を持つと考える (AspP=Aspect Phrase)。



Asp 位置へ移動した V は過去分詞として実現される。更に、V の移動によって生成した Asp の複合体は Agr 位置へ移動し、性・数に関する一致が発動する (以後、AspP の標示は省略する)。(21d) の非文法性から明らかなように、embd. V の sister 位置に生成される NP は、SPEC-HEAD Agreement の要請により、Aux に下位範疇化される AgrP の SPEC 位置を経由して移動しなければならない (これに関しては後述する)。(21b) の構造として、以下の (23) が仮定される。



基底生成された位置にある主語 NP*は格を付与されない。よって、当該主語 NP*は格を付与される位置 (matrix SPEC (Agr)) へ移動する。Aux に下位範疇化される AgrP は bar. を構成する。¹⁷⁾しかし、AgrP の bar. 性は、Aux (*avoir*) が T 位置へ移動した段階における当該 AgrP の SPEC (T) 位置への移動により相殺される (本稿の定義 (20))。つまり、主語 NP* の matrix SPEC (Agr) 位置への移動が可能となる。NP (*trois tables*) に格を付与する要素は何か、基底生成された位置にある V が当該 NP に格 (Acc) を付与すると考えることも可能である。本稿では、V による格付与は当該 V が主要部移動を完了した段階 ((23) では、V が Aux に下位範疇化される AgrP の主要部に移動した段階) で発動すると仮定する。Baker (1988) の Government Transparency Corollary (GTC) によると、V の付加移動によって生成した Agr の複合体は、当該 V が基底生成された位置で統率した要素をも統率する。¹⁸⁾しかし、本稿では、NP (*trois tables*) に格を付与する要素は V の付加移動によって生成した Agr の複合体ではなく、当該 Agr に付加移動した V であると考えられる。つまり、GTC は、基底生成された位置における V の統率機能が、一定の条件の下で、それが当該 Agr 位置へ付加移動した場合にも保存されると解釈される。このように解釈さ

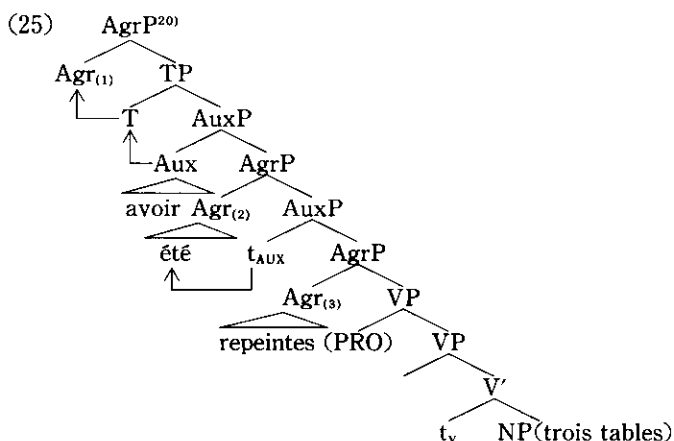
れた GTC の適用条件とは何か。それは、付加するゼロ範疇と付加を受けるゼロ範疇との間の素性 $[\pm V]$ に関する一致であると考えられる。そこで、以下の仮説を設定する。

(24) Condition on the Application of GTC:

An adjoining zero category and its host have the same value with respect to the feature $[\pm V]$.

言うまでもなく、V は $[+V]$ の素性を持つ。複合時制を導入する Aux (*avoir*) によって下位範疇化される Agr と、 $[\pm \text{Finite}]$ CP (AgrP) 中の Agr と T は $[+V]$ の素性を持つと考えられる。つまり、(23) において Aux (*avoir*) に下位範疇化される AgrP の主要部位置へ移動した V は t_v の sister 位置にある NP (*trois tables*) を統率し、格(Acc)を付与する。¹⁹⁾

次に、受動構文 (21a) を検討する。その構造として、以下の (25) を仮定する (簡略表示)。



受動構文中の過去分詞は、一般に Acc 付与機能を失うと考えられている。結果として、Case Filter の要請から、NP (*trois tables*) は格が付与される位置 (matrix SPEC (Agr)) へ移動する。受動構文における過去分詞がその目的語 NP に格を付与しないプロセスが問題となる。本稿の解釈では、何故 Agr_{(3)} 位置へ移動した V がその目的語 NP (*trois tables*) に格を付与しないのが問題

となる。複合時制を導入する Aux (*avoir*) に下位範疇化される Agr の場合と異なり、受動の Aux に下位範疇化される Agr が [-V] の素性を持つと考えてみよう。その場合、GTC の適用が阻止され、当該 Agr 位置へ付加移動した V はそれが基底生成された位置の sister である目的語 NP を統率しないことになる (よって、格も付与しない)。

(25) において、過去分詞が matrix SPEC (Agr) 位置へ移動する目的語 NP (*trois tables*) と性・数に関して一致する事象はどのように説明されるか。本稿では、Kayne (1989) と Ouhalla (1991) の主張に従う。つまり、受動構文における NP 移動は、受動の Aux によって下位範疇化される Agr の SPEC 位置を経由によって発動すると想定する。また、当該 SPEC (Agr) 位置を経由する要素が目的語に限定されることは、当該 Agr と embed. V の sister 位置にある目的語 NP が同一指標の関係にあると考えることにより導出される ((27) については、後述する)。²¹⁾

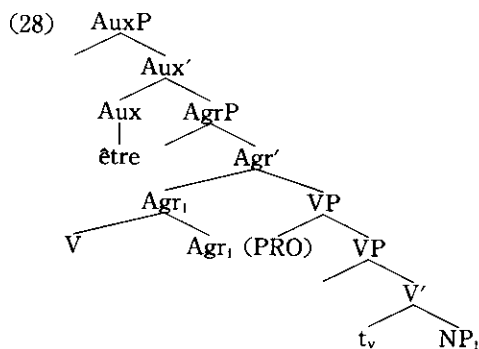
(26) Coindexing Rule in Passive (A) (CRP(A)):

Coindex a passive Agr with the sister NP of the head of a VP subcategorized by the Agr in question.

(27) Coindexing Rule in Passive (B) (CRP (B)):

Coindex a passive Agr with the sister element to the head of a maximal projection subcategorized by the Agr in question.

この同一指標関係は以下の構造で示される。



本稿の仮説群は(21)の用例を適切に説明すると思われる。(21c-d)の複合時制用例では、NP要素の移動が Aux (*avoir*)に選択される範疇の SPEC 位置を義務的に経由すると考えられる。受動構文における上の同一指標の関係は、対応するスペイン語においても成立すると仮定する。

3. Moore (1991)の説明方法

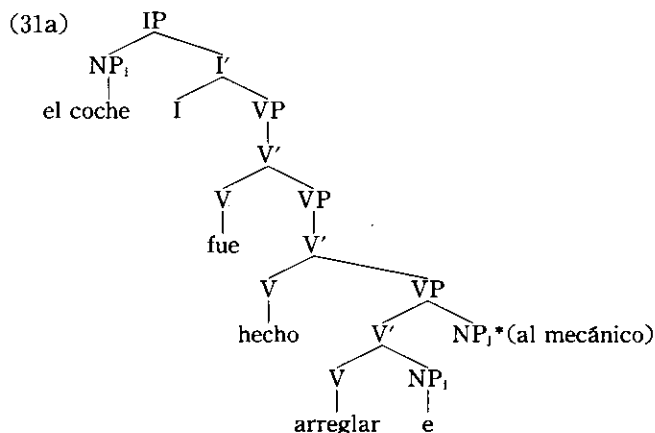
Moore (1991)は、本稿の(1d)の相違のみを取り扱う(便宜上、再掲する)。

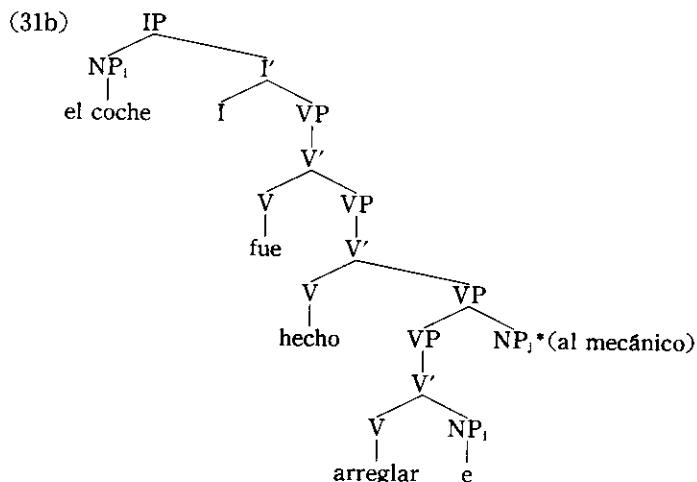
- (29) */?(?)*el coche fue hecho arreglar al mecánico*
 'the car was made to repair to the mechanic'

Moore (1991)は、NP 移動現象の説明方法として、Rizzi (1990)の先行詞統率連鎖の概念を用いる。つまり、NP 移動において形成される連鎖の各 Link は先行詞統率の要件を満たさなければならないと考える。連鎖の定義は(30)である。

- (30) (a_1, \dots, a_n) is a chain only if, for $1 \leq j < n$, a_j antecedent-governs a_{j+1} .
 (Rizzi 1990:p.92)

Moore は、(29)の A 方言と B 方言用例に対してそれぞれ、(31a, b)を想定する。²²⁾





(31a, b) で異なるのは、主語 NP* (*el mecánico*) が基底生成される位置である。A 方言の (31a) では、当該主語が SPEC (V) 位置に生成される。B 方言の (31b) では、当該要素が VP に右方付加した位置に生成される。embd. V の目的語の移動により、NP 連鎖 (*el coche_i, e_i*) が形成する。当該連鎖上の最大範疇 (VP) は bar. を形成しない。しかし、embd. SPEC (V) 位置に生成された主語 NP* (*el mecánico*) は RMB となる。つまり、目的語 NP (*el coche*) の移動は (30) の連鎖条件 (先行詞統率) を満たすことはない (よって、非文法的となる)。一方、(31b) 中の主語 NP* は、RMB を形成しない。よって、当該文は基本的に文法的と予測される。

この Moore (1991) の説明方法が妥当するためには、(31a) 中で主語 NP* が基底生成される位置と目的語 NP (*el coche*) の着地点である matrix SPEC (I) 位置がともに A 位置であると考えなければならない。主語 NP* が基底生成される位置は θ 位置であり、同時に A 位置である点は問題ない。また、D 構造において項 (Argument) が生起する位置を A 位置と規定する場合、matrix SPEC (I) を A 位置と前提することはできないと考えられる。つまり、(29) の相違を説明する Moore (1991) の説明法には問題があることになる (これらの例は Relativized Minimality (RM) によっても説明できないであろう)。

仮に、matrix SPEC (I) 位置が A 位置と考えた場合でも問題が生ずるであろう。Moore (1991) は、更に以下の (32a) の例を説明しようとする ((32b) は対応する能動表現)。 (32a) は、(29) に比してその文法性 (認容可能性) が

向上することが指摘されている。

- (32) a. ?este coche fue hecho arreglar por mi hermano
 'this car was made to repair by my brother'²³⁾
 b. mi hermano hizo arreglar este coche

Kayne (1975)に従って、本稿では(32b)のタイプを FAIRE-PAR 構文と呼ぶ。Moore (1991: ch. 5)では、当該構文の embd. VP は主語が基底生成される位置を欠くと仮定される。つまり、FAIRE-PAR 構文の embd. V に対する主語は、当該 V の SPEC 位置にも、VP Adjunct としても生成されないことになる。²⁴⁾この場合、embd. V の目的語の移動経路上に RMB が介在しないことになる。また、(29)の方言上の相違を説明する彼の議論が妥当するならば、A と B の両方言において、(32a) の文法性が向上すると予測されることになる。しかし、実際には、既に議論した (1c) と次の (34) が示すように、文法性の向上は観察されない ((1c) を (33) として再掲する。(34) は Zubizarreta (1987) による。(34b, c) は (34a) に対応するイタリア語とフランス語の例)。

- (33) */?(?)la catedral fue hecha construir por el Papa (= (1c))
 'the cathedral was made to construct by the pope'

- (34) a. *esos pasajes fueron hechos leer (a/por Juan)²⁵⁾
 b. quei brani furono fatti leggere (a/da Giovanni)
 c. *ces passages ont été faits lire (à/par Jean)
 'those passages were made to be read by John'

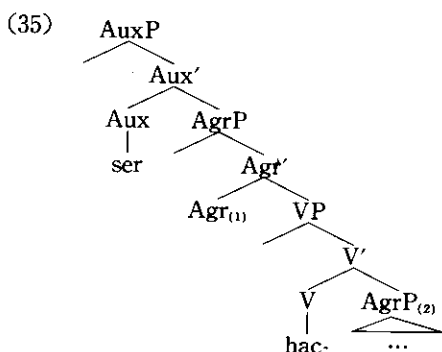
上で述べたように、Moore (1991) の説明方法は、少なくとも受動 HACER 使役構文に関しては問題があると考えられる。そこで、第4節では、代案を示すことにする。

4. 代案

本稿の第2節で示された Coindexing Rule in Passive (CRP (A)) に留意されたい。受動構文において、embd. V の sister 位置ある要素は義務的に受動 Aux に下位範疇化される AgrP の SPEC 位置を経由して移動すると仮定する。

また、当該 SPEC (Agr) 位置を経由する要素は Agr と同一指標の NP に限定される (SPEC-HEAD Agreement). この仮定により、受動構文において、matrix SPEC (Agr) 位置へ移動した NP と過去分詞との性・数に関する一致現象が説明される。

ここで、CRP (A) を拡張した (27) の CRP (B) を仮定する。この規則の適用により、HACER 使役構文の受動では以下の構造 (35) が仮定されることになる (HACER 使役構文において、matrix V (*hac-*) が AgrP を下位範疇化すると仮定されている点に留意されたい)。つまり Agr₍₁₎ と Agr₍₂₎ は同一指標の関係になる (その指標を *i* で表す)。



また、仮に、AgrP₍₂₎ 内部に生成される NP が Agr₍₁₎ と同じ *i* という指標をもつと考えると、(36) の条件によってこの指標付けは許されないことになる。結果として、AgrP₍₂₎ 内部に生成される NP 要素の SPEC (Agr₍₁₎) 位置への移動が排除されることになる。

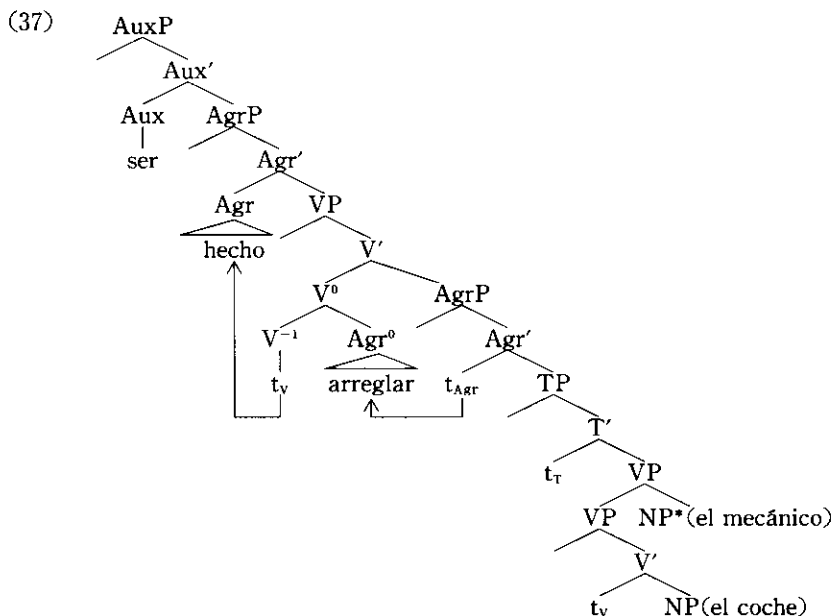
(36) *i*-within-*i* Condition:

$$* [\text{ }_{i_1} \dots \delta_i \dots]$$

それは、AgrP₍₂₎ 内部に生成される NP_j ($j \neq i$) の指標が SPEC (Agr₍₁₎) 位置へ移動した場合、当該 Agr₍₁₎ の指標 (*i*) と衝突するためである (SPEC-HEAD Agreement). ここで、A 方言において本稿の CRP (B) の規則が適用されると考えてみよう。この方法は、A 方言の例 (1) 中の非文法性を説明すると思われる。一方、B 方言では当該規則が適用されない、少なくともその適用が随意

的だと仮定してみよう。その場合、B 方言の (1a- d) の中の例は適切に文法的と予測される。²⁶⁾ここで、B 方言における (1e) の非文法性が問題となる。

(1e)の非文法性は、これまで本稿で設定された仮説群によって説明することはできない。本稿では、embd. VP 中に生起する主語 NP*と目的語 NP に対する格付与に関する規制によって当該例の非文法性を説明する。前述のように、他動詞が受動構文で用いられた場合に、その目的語に格(Acc)を付与する機能を失うと考えられる(本稿では、受動の Agr 位置へ移動した V が基底生成された位置でその sister に対して持っていた統率機能を失うと考えた(本稿第2節))。受動構文における HACER も同様の振る舞いを示すと考えてみよう。つまり、使役構文において形成される複合動詞[matrix V⁻¹ (hac-) + INF]はそれが持つ格(Acc)付与機能を失うと仮定する(この格付与機能の喪失を当該格付与の空適用の一種と考えることにする)。²⁷⁾本稿の議論では、当該 CV(複合動詞)の対格付与機能の喪失は以下のように説明される。(1d)に対応する構造(37)で考える(便宜上、(1)を再掲する)。



- (1) a. */?(?) Juan fue hecho venir 'John was made to come'
- b. */?(?) el testigo fue hecho comparecer ante el tribunal
'the witness was made to appear in court'
- c. */?(?) la catedral fue hecha construir por el Papa
'the cathedral was made to construct by the pope'
- d. */?(?) el coche fue hecho arreglar al mecánico
'the car was made to repair to the mechanic'
- e. */*fui hecho traer un regalo 'I was made to bring a present'

本稿では、V は主要部移動を完了した段階で格を付与すると考えられている。よって、embd. V (*arreglar*) は matrix V^{-1} (*hac-*) の MSS (Morphologically Selected Slot) 位置で格を付与する可能性を持つ。同様に、複合動詞の格付与は、その構成要素が主要部移動を完了した段階つまり、当該 matrix V^{-1} が受動 Aux (*ser*) によって下位範疇化される AgrP の主要部位置で格を付与する。複合動詞の構造格 (Acc) 付与は如何なる条件で発動するか。仮に、以下のように考える。複合動詞の構成要素 (α, β) の一方が他方を統率する場合に、当該複合動詞の格付与が実現される。この前提において、受動 Aux (*ser*) によって下位範疇化される AgrP の主要部位置へ移動した matrix V^{-1} は、当該動詞の MSS 位置へ移動した Agr⁰ (不定法形態である *arreglar*) を統率することはない (GTC 適用条件(24))。結果として、複合動詞の対格付与が不可能となる (対格付与の空適用)。

最初に、(1d) 中の embd. V の主語 NP* (*el mecánico*) に格 (Dat) が付与されるプロセスを検討する。2 様の格付与が考えられる。スペイン語の複合動詞[matrix V (*hac-*)+INF]の持つ Case Array (9b) が Last Resort の性格である点に留意されたい。この場合、embd. V の格付与と複合動詞の (9a) による格付与は排除される。²⁸⁾つまり、最終的に複合動詞の Case Array (9b) による格付与が発動することになる (主語 NP* (*el mecánico*) に対する Dat 付与の他の可能性については後述する)。しかしながら、(1d) における格付与を説明する方法は (1e) を不適切に文法的と予測することになる。前述のように、複合動詞の Case Array (9a) による目的語 NP (*un regalo*) への対格付与は許容されない。結果として、当該 NP に対格を付与するのは embd. V (*traer*) となる。最終手段 (Last Resort) としての Case Array (9b) は空適用される ((7d))。このように、embd. V (*traer*) が NP (*un regalo*) に対格 (Acc) を付与

可能であると考え、(1e)は文法的と予測されることになる。一方、何らかのプロセスによって、embd. V (*traer*) による Acc 付与が許容されないとすればどうであろうか。

ここで、(1d) 中の embd. V の主語 NP* (*el mecánico*) に Dat 付与する他のプロセスについて検討する。その条件として、以下の仮説を設定する。

(38) Hypothesis Concerning a Vacuous Application of Case Assignment:

- (a) Case Arrays of an embd. V and a Complex Verb form a kind of Case Array Union with the Case Array (___Acc (Dat)).
- (b) Two (or more than two) vacuous applications of Case assignment are equal in effect to one actual application.
- (c) The same element cannot be assigned two Cases, whether by a vacuous application or by a real one.

(1d) において、embd. V (*arreglar*) と複合動詞の Acc 付与は空適用されている。これは、Case Array (9a) の Acc 付与が実際に適用された効果をもたらすと考えられる。結果として、主語 NP* (*el mecánico*) に Dat 付与する可能性が生まれる。それでは、(1e) の非文法性はどのように説明されるか。embd. V (*traer*) がその目的語である NP (*un regalo*) に対格を付与しない派生は、Case Filter によって排除される。embd. V (*traer*) が NP (*un regalo*) に対格を付与する派生はどうであろうか。前述のように、受動使役構文では、Case Array (9a) により格付与は適用されない。よって、当該 Case Array の Acc と Dat は空適用される。格付与に関する仮説 (7d) により、Case Array (9b) の Dat も空適用される。ここで、Dat の空適用が 2 回である点に留意されたい。仮説 (38b) により、これは Dat の 1 回の実適用 (Actual Application) と等価になるであろう。実適用に関する仮説 (7b) が空適用での Union による Case Array (___Acc (Dat)) に対しては発動すると考えると、この場合も、与格 (Dat) の付与は対格 (Acc) の付与を前提する。つまり、空適用の Case Array は NP (*un regalo*) に対格を付与する。結果として、NP (*un regalo*) は、実適用と空適用の双方において対格を付与されることになる。仮説 (38c) にあるように、同一要素に対する 2 重の格付与 (格指定) が許容されないとすれば、この場合の派生は排除されることになる。((1a-c) における格付与では、仮説 (38) の効果が観察されないため、その検討は省略する)。このように、仮説 (38) は (1d) と (1

e) の相違を適切に説明すると思われる。²⁹⁾

5. 結語

以上において、スペイン語における受動 HACER 使役構文に対して若干の論考が加えられた。本稿において最も重要な前提は、以下の (39-40) である。

- (39) フランス語と異なり、イタリア語とスペイン語の不定法 CP (AgrP) 中の動詞は Agr 位置まで主要部移動する (フランス語では、T 位置まで移動する)。
- (40) a. 受動構文において、動詞の目的語 NP は受動 Aux によって下位範疇化される AgrP の SPEC 位置を経由して移動する。
 b. 同一指標付け規則 (27) (CRP (B)) の適用が方言、あるいは言語ごとにパラメータ化される。
 c. 格付与の空適用に関する仮説 (38) (Hypothesis Concerning Vacuous Application of Case Assignment)

A 方言においては、同一指標付け規則 (27)(CRP (B)) の適用が義務的に適用されるため、matrix $V^{-1}(\text{hac-})$ の sister である AgrP 内部に生成される NP の当該 AgrP 外部への移動が阻止される。一方、同一指標付け規則(27)(CRP (B))の適用が随意的である B 方言では、格付与の空適用に関する仮説(38)によって排除される (1e) を除くすべての例が基本的に文法的と予測されることになる。本稿で検討したスペイン語の用例に対応するフランス語とイタリア語の用例を更に調査した上で、(39-40) の前提を修正すべきことは言うまでもない。

註

- 0) 本稿は、筆者が日本ロマンス語学会第31回大会 (於学習院大学, 1993年5月23日) において行った研究発表の一部である。その席上、スペイン語用例 (1) の文法性判断に関して、京都外国語大学の近松洋男氏と東京外国語大学の原誠氏より有益なアドバイスをいただいた。本稿では、スペイン語の母国語話者 (Treviño 1992, Cano Aguilar 1981) とスペイン語研究者 (Moore 1991) の文法性判断に従って論を進める。
- 1) B 方言における (1a-d) は基本的に文法的と判断される。日本ロマンス語学会第31回大会の席上、東京外国語大学の原氏は例えば (1d) の意味が以下の能動による (1a-b) で表現されるのが普通であると指摘した。

(i) a. le hicieron al mecánico arreglar el coche

b. le hicieron arreglar el coche al mecánico

上の(i)に類似する能動表現がより普通であるとすれば、それは本稿の(1a-b)に対する判断(??)と何らかの関連があると考えられるであろう(更なる調査の必要がある)。

本稿では、フランス語とイタリア語の受動使役構文の詳細は取り扱わない。これに関する考察は稿を改める(『ロマンス語研究』27号に掲載予定)。

- 2) フランス語の FAIRE 使役構文に関する初歩的論考として、石岡(1992)を参照されたい。イタリア語の[-Finite] CP (AgrP) 中での V の移動に関しては、Belletti (1990) を参照されたい。
- 3) Sportiche (1988), Koopman and Sportiche (1991), Contreras (1991)等を参照されたい。
- 4) matrix V (*hac-*) に対する主語 NP* もまた、VP に付加した位置に生成されるが、その表示は省略する。matrix (*hac-*) もまた、T を経由して Agr 位置まで移動し、定動詞として実現される(この移動と相対化最小条件(Relativized Minimality)との関係に関しては、Guasti (1991) を参照されたい)。基底生成された位置にある主語 NP* には格が付与されない。Case Filter の要請から、当該主語 NP* は matrix SPEC (Agr) 位置へ移動することになる。embd. AgrP 中の主語 NP* は、embd. V によって格を付与されることはない。後述するように、当該主語に格を付与するのは、複合動詞[matrix V (*hac-*) + INF]あるいはmatrix V (*hac-*)である。
- 5) (6) の Case Array は Goodall (1987) による。スペイン語において、*a NP* が同時に Acc と Dat の実現形態である点に留意されたい。
- 6) (7c) の規制がもたらす効果は、同一 VP 内部における複数の Acc 付与を排除する旨の規制によっても発動する(Moore 1991:p.183)。後者の規制の場合、主語 NP* に付与された Acc が Dat に書き換えられることになる。この規制と(7c)のその妥当性に関しては稿を改める。
- 7) Strozer (1976) は、(8b) と (8c) の意味が異なると指摘する。(8b) と (8c) はそれぞれ、強制(coercion)と説得(persuasion)を表現すると言う。つまり、(8b) と (8c) はそれぞれ、(i) と (ii) に言い換えられる。embd. V が他動詞の場合にも、同様の意味上の差異があるとされる。Strozer(1976)の説が Non-Lefmo 地域のすべての方言に妥当するかどうかは不明である。本稿では、(8c) の Dat 接語(*le*)を Leismo の影響と考えて論を進める。
- (i) I forced her to weep
- (ii) I had her weep
- 8) この場合、通例主語が生成される位置(VP に付加した位置)は空(ϕ)と考える(cf. 石岡(1992, 1993), Moore (1991))。
- 9) 対応するフランス語の知覚構文においても、matrix V は AgrP を下位範疇化すると考えられる。しかし、スペイン語(イタリア語)の場合と異なり、フランス語の[-Finite] Agr は V が主要部移動した場合でもその sister である TP を L 標示することはない(結果として、TP が「障壁」(Barrier, bar. と略記)となる)。つまり、フランス語の知覚構文では、embd. AgrP 中の主語 NP* が embd. SPEC (Agr) 位置へ移動することはない。何らかのプロセスによって、当該 TP の bar. 性を相殺する必要が生まれる。これに関しては後述する。
- 10) 主語 NP* でなく、embd. V の sister NP(例えば、NP (*los soldados*))が当該 SPEC (Agr) 位置へ移動した場合の派生は Case Filter によって排除される(主語 NP* に格が付与されない)。恐らく、embd. V が能格動詞である以下の (i) は文法的であろう。

(i) vimos a Pancho venir 'we saw Pancho come'

その場合、V の sister 位置に基底生成される NP* も embd. SPEC (Agr) 位置へ移動可能と考えなければならない(能格動詞の場合)。

- 11) T を経由して embd. Agr 位置へ移動した V が NP (*los soldados*) に Acc を付与すると前提した立論も可能であろう(本稿の第2節以降では、この前提に基づいて論を進める。
- 12) Cono Aguilar (1980:p.244) は次の (i) の用例を挙げる。この例は Non- Lelismo の方言に属するものであり、頻繁ではないが許容されると言う。

(i) lo (Acc) hicieron traer un paquete
'they made him bring a packet'

上の例は、本文の(15)のグループに属すると考えられる。また、本稿の仮説群は、embd. AgrP 中の主語 NP* が無生物である例 (ii, iii) を説明できない((ii, iii) は本文の (15) のグループに属する)。(iv) が示すように、当該グループでは、知覚構文にける無生物主語は不定法形態の前位置に生起可能である。

(ii) a. *hicimos la lavadora funcionar (Moore 1991:p.158)

b. hicimos funcionar la lavadora (同上)

'we made the washing machine run'

(iii) a. *dejamos la lavadora funcionar (Moore 1991:p.158)

b. dejamos funcionar la lavadora (同上)

'we let the washing machine run'

(iv) a. vimos la casa arder (Moore 1991:p.158)

b. vimos arder la casa (同上)

'we saw the house burn'

上の例は、DEJAR 構文が HACER 構文に属するのか、知覚構文に属するのかが問題となることを明示する(これらの問題に関しては、稿を改めて検討する)。

- 13) Relativized Minimality bar. に関する定義体系に関しては、Rizzi (1990), Cinque (1990), Ouhalla (1991) 等を参照されたい。

- 14) 任意の最大範疇 (XP) がそれ自身とその主要部 (X) 一致すると前提すると、 α はそれが θ 統率する範疇 β を \perp 標示することになる。

- 15) スペイン語の DEJAR (更に、知覚動詞) と同様に、LAISSER は Case Array (____ Acc) を持つと考えられる。

- 16) フランス語の使役構文における格付与に関しては、石岡 (1992, 1993) を参照されたい。

- 17) 英語の場合と異なり、ロマンス諸語において VP-Preposing は観察されない。これは、ロマンス諸語の Aux がその sister である AgrP を θ 統率しないことを物語るものであろう (cf. Haverkort 1992:p.199)。

- 18) Government Transparency Corollary (GTC):

A lexical category which has an item incorporated into it governs everything which the incorporated element governed in its original structural position (Baker 1988:64)

- 19) これにより、[\pm Finite] CP (AgrP) において、T あるいは Agr 位置まで移動した V は、それが基底生成された位置で統率可能な要素を統率することになる。言うまでもなく、仮説 (24) は仮のものであり、更なる検討を要する。また、Burzio's Generalization の因数分解、つまり、この一般化を導出する原理の探求も必要であろう (cf. Sportiche 1990)。

- 20) 前述のように、フランス語の [-Finite] Agr は T を経由した V が移動した場合でも、その sister である TP を \perp 標示しない (TP=bar.)。しかしながら、(25) の構造からも明らかなように、Aux に下位範疇化される AgrP の主要部 (Agr) は、語彙的要素(この場合、

V あるいは他の Aux) が移動した場合にその sister である最大範疇を L 標示すると考えなければならない。主語 NP* の位置での PRO の生成可能性については、Ouhalla (1991: p.213, note20) を参照されたい。

- 21) この論法は、Ouhalla (1991:p.100) による。なお、スペイン語では (21c) のような複合時制での過去分詞の一致が観察されない (これに関しては、稿を改める)。また、フランス語における複合時制 (能動) における過去分詞は種々の問題を提起する。(ia-ib) で観察されるように、自動詞 (能格動詞) 複合時制を導入する助動詞の別によって、一致、不一致が左右される。

- (i) a. Marie est allée/*allé 'Mary has gone'
b. Marie a travaillé/*travaillée 'Mary has worked'

また、知覚構文の複合時制における過去分詞の一致は随意的であるが、FAIRE 使役構文では一致が発動しない。

- (ii) a. cette maison, je l' ai vu/vue bâtir
'as for this house, I have seen it build'
b. cette maison, je l' ai fait/*faite bâtir
'as for this house, I have made it build'

更に、WH 要素移動では一致が随意的である ((iii) は Kayne 1989 による)。これらの問題は、Lois (1990) 等を参照した上で更に検討する必要がある。

- (iii) je me demande combien de tables Paul a repeint (repeintes)
'I wonder how many (of) tables Paul has repainted'

- 22) Moore (1991) は、受動 HACER 使役構文における matrix V (*hac-*) は VP を下位範疇化すると考えている。

- 23) (32) に対する文法性判断は、Moore (1991) による。Moore (1991:p.295) は (32a) に対する英語訳として、以下の (i) を挙げる。

- (i) 'my brother had this car fixed'

つまり、(32a) において、V (*arreglar*) の動作主表現 (*por NP*) が省略されている。

- 24) 石岡 (1992, 1993) は、この場合の主語が基底生成される位置が空 (ϕ) であると考ええる。

- 25) (34a) の Zubizarreta (1987) によるスペイン語用例は、本稿 A の方言に属するものである。Moore (1991:p.191) が FAIRE-PAR 構文の例として挙げる以下の (i) から判断すると、(34a) もまた FAIRE-PAR 構文と考えられるであろう。

- (i) Curro_i se_i hizo insultar (por sus compañeros)
'Curro_i made his friends insult him_i'

- 26) この議論が妥当するならば、フランス語の受動 FAIRE 構文 (3) では CRP(B) の適用が義務的に適用されることになる。イタリア語の例 (4) では、その適用が随意的と考えられる。フランス語の受動 LAISSER 使役構文では、方言ごとに CRP (B) の適用がパラメータ化されることを示す用例が存在する (イタリア語とフランス語における受動使役構文、フランス語の受動 LAISSER 使役構文に関する詳細な考察は稿を改める)。

- 27) 本稿では、空適用は不適用と同じ意味で用いられる。

- 28) GTC の適用条件 (24) により、matrix V⁻¹ (*hac-*) による主語 NP* に対する格付与も許容されないと考えられる。

- 29) スペイン語 (B 方言) と同様に、イタリア語では (27) の同一指標化規則 (CRP(B)) の適用が随意的と考えられる。イタリア語の FARE 使役構文が基本的にスペイン語のそれと同じであると考えてみよう。その場合、スペイン語の例 (1d) の文法性を説明する方法は対応するイタリア語の例 (4d) の文法性を説明する。それでは、(1e) と (4c) の相違はどのように説明されるか、FARE 使役構文における複合動詞 [matrix V (*fa-*) + INF]

は、スペイン語のそれと異なり、Case Array (9a) のみ有すると考えられる。つまり、複合動詞が空適用する Dat 付与は単一である。結果として、(4c)中の embd. V (*riparare*) の NP (*la macchina*) に対する Acc 格付与が可能となる。また、この FARE 使役構文における複合動詞の Case Array に関する前提は (ia) を非文と予測することになる ((ib) の例は、Radford 1979 による)。

- (i) a. *Paolo fece scrivere la lettera a Giorgio a Maria
- b. Paolo fece scrivere la lettera a Giorgio da Maria
- 'Paolo made Maria write the letter to Giorgio'

参考文献

- Baker, M. C. (1988). *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press Chicago, Illinois.
- Belletti, A. (1990). *Generalized Verb Movement*. Rosenberg & Selier, Torino.
- Bordelois, I. (1988). "Causatives: From Lexicon to Syntax." *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 57-93.
- Burzio, L. (1986). *Italian Syntax: a Government-Binding Approach*. Reidel, Dordrecht.
- Cano Aguilar, R. (1981). *Estructuras Sintácticas Transitivas en el Español Actual*. Gredos, Madrid.
- Chomsky, N. (1986). *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Cinque, G. (1990). *Types of A' Dependencies*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Contreras, H. (1991). "On the Positions of Subjects." Rothstein, S. (ed.) *Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure, Heads and Licensing*. Academic Press, London.
- Finnemann, D. (1982). *Aspects of the Spanish Causative Construction*. Doctoral dissertation, University of Minnesota.
- Goodall, G. (1987). "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives." Neidle, C. and Rafael A. Núñez Cerdeño (eds.) *Studies in Romance Languages*. Foris, Dordrecht.
- Guasti, M. T. (1991). "Incorporation, Excorporation and Lexical Properties of Causative Heads." *The Linguistic Review* 8, 209-232.
- Havorkort, M. (1992). "Clitics, Affix Order and the ECP." *WCCFL* 10, 197-207.
- Kayne, R. (1975). *French Syntax: the Transformational Cycle*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Kayne, R. (1989). "Facets of Romance Past Participle Agreement." Benicà, P. (ed.) *Dialect Variation and the Theory of Grammar*. Foris, Dordrecht.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991). "The position of Subjects." *Lingua* 85, 211-258.
- Lois, X. (1990). "Auxiliary Selection and Past Participle Agreement in Romance." *Probus* 2, 233-255.
- Moore, J. (1991). *Reduced Constructions in Spanish*. Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Ouhalla, J. (1991). *Functional Categories and Parametric Variation*. Routledge, London and New York.
- Pearce, E. (1990). *Parameters in Old French Syntax: Infinitival Complements*. Kluwer, Dordrecht.
- Radford, A. (1979). "Clitics under Causatives in Romance." *Journal of Italian Linguistics*.

- tics 4, 137-181.
- Reed, L. (1990a). "Biclausality, Barriers and the French Causative Construction." *Cahiers Linguistiques d'Ottawa* 18, 79-93.
- Reed, L. (1990b). "Adjunctions, X⁰ Movement, and Verbal Government Chains in French Causatives." *MIT Working Papers in Linguistics* 12, 161-176.
- Reed, L. (1991). "The Thematic and Syntactic Structure of French Causatives." *Probus* 3.3, 317-360.
- Reed, L. (1992). "Remarks on Word Order in Causative Constructions." *Linguistic Inquiry* 23, 164-172.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Roberts, I. (1991). "Excorporation and Minimality." *Linguistic Inquiry* 22.1, 209-218.
- Sportiche, D. (1988). "A Theory of Floating Quantifier and Its Corollaries for Constituent Structure." *Linguistic Inquiry* 19, 33-60.
- Sportiche, D. (1990). "Movement, Agreement, and Case." Ms., UCLA, Los Angeles, California.
- Strozer, J. (1976). *Clitics in Spanish*. Doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.
- Subirats-Rüggeberg, C. (1987). *Sentential Complementation in Spanish*. John Benjamins, Amsterdam.
- Treviño, E. (1992). "Subjects in Spanish Causative Constructions." Hirschbühler, P. and K. Koerner (eds.). *Romance Languages and Modern Linguistic Theory*. John Benjamins, Amsterdam.
- Zubizarreta, M. (1986). "Le Statut Morpho- Syntaxique des Verbes Causatives dans les Langues Romanes." M. Ronat & D. Couquaux (eds.) *La Grammaire Modulaire*, Les Éditions de Minuit, Paris.
- Zubizarreta, M. (1987). *Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax*. Foris, Dordrecht.
- 石岡精三 (1992). 「フランス語 *Faire* 使役構文における CM clitics (Case-Marked Clitics) と NCM clitics (Non Case-Marked clitics) の相違について」長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』6号, 71-100.
- 石岡精三 (1993). 「Laisser/Faire 使役構文における格付与と Clitic 移動について」『ロマンス語研究』26号, 115-133.